



その5

グローバルな視点から 日本の自然を観光のまなざしで捉えられるか？

東海大学観光学部教授 田中伸彦

グローバルに見た日本の自然

もし手元に世界地図があつたら、ぜひ開き、

要するに、普通に考えれば、地球上で日本が

ヤカラハリ砂漠、ナミブ砂漠、アタカマ砂漠と、
こちらも乾燥地のオンパレードである。

日本を見つけてほしい。見
つかったら、最北端と最南
端から、それぞれ横に線を
引いてほしい。ユーラシア

存在する緯度の陸地は砂
漠になりやすい。その理
由は科学的にも説明がつ
く。

大陸、アフリカ大陸、北ア
メリカ大陸などを通過する
平行な線が引かれたと思
う。2本の線の間には、何
があるだろうか。

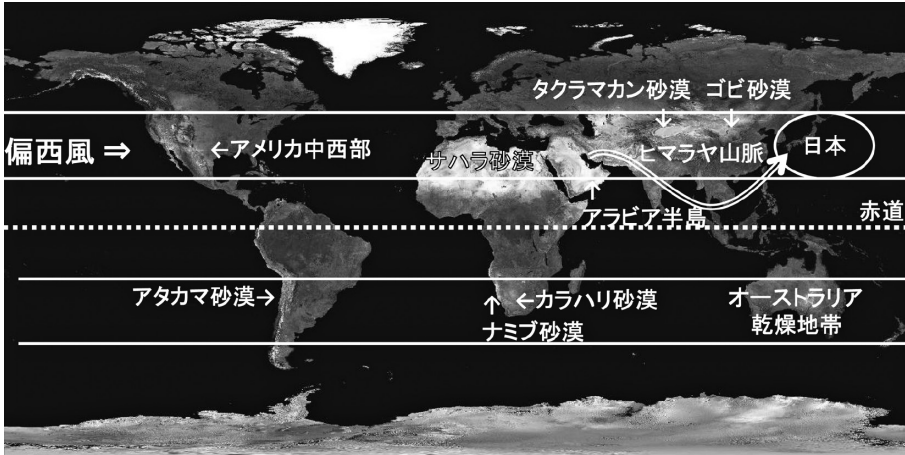
太陽によって、地球上
で最も暖められる場所は
赤道付近である。赤道付
近では、空気が暖められ
て上昇気流となり、空高

日本から西に向けて出発
すると、ゴビ砂漠、タクラ
マカン砂漠、アラビア半
島、サハラ砂漠、アメリカ
中西部の乾燥地帯と軒並み
乾燥地が連なっていること
に気付いていたただけるだろ
うか。

く上がり、雲が湧き、雨
が降る。その雨のおかげ
で赤道付近には豊かな熱
帯雨林が広がる。ところ
で、雨を降らせた後、上
空に残される乾いた空気
はどこへ行くのだろうか？

また、同じ緯度で南半球
に反転させて線を引いても
状況は同じことが分かる。
オーストラリアの乾燥地帯

か？ 赤道付近は、先ほ
ど言ったように強い上昇
気流があるので真下には
降りられない。そのため、
乾いた空気は南北に移動



日本が存在する緯度は本来砂漠になってもおかしくない場所である

豊かな日本の森

このように、グローバルな気候システムから
考えた場合、森に覆われた国として現在日本が
存在することは、奇跡と言わざるを得ない。緑
が豊かなことは、観光面からは天与の好条件で
ある。

ところで、なぜ日本は砂漠にならず、豊かな
森に覆われているのだろうか。その要因の一つ
には、ヒマラヤ山脈が関係している。先に述べ
た乾いた空気は、偏西風に乗る、地球の周りを
横方向にぐるぐる回る。つまり、乾いた空気は、
乾いたまま同緯度で循環する。しかしながら、
この流れが邪魔される場所が1カ所存在する。
それがヒマラヤ山脈である。

乾いた偏西風は、対流圏という厚さ10^{キロメートル}程
度の空気の層となって循環するが、そのうちの
9^{キロメートル}近くをヒマラヤ山脈は塞いでしまう（エ
ベレストの標高は8848^{メートル}）。そうすると、
ヒマラヤ山脈に阻まれて、偏西風は蛇行せざる

を得なくなる。偏西風は南東に進路を変え、インド洋、南シナ海、東シナ海の上空をカーブしながら進み、徐々に湿気を蓄え、日本や韓国に到達して雨を降らせる。ヒマラヤ山脈がなければ、日本の梅雨に、ここまでの雨を降らせる力はないといえる。

偏西風の蛇行のおかげで、日本は降水量に恵まれ、国土の3分の2を森が覆う。加えて、秋の台風や冬の豪雪など、降水量を底上げする要因が更に重なるため、砂漠化が起こる余地がほとんどないのである。

つまり、世界の人々がこの緯度で森を旅したければ、日本は絶好のターゲットとなる。ただ、残念ながら、大半の日本人はこのアドバンテージに自覚がないどころか、関心も薄い。天与の自然条件は軽視され、いまだにマスコミは、爆買いやおもてなし、アニメやフジヤマ芸者的なものに目を奪われている。日本人は「日本の自然」という観光のキラリコンテンツを十分に活かせていない。

更にいえば、伝統文化も、自然の影響が大きい。例えば、木造の神社仏閣は、まさに森林文化の賜である。また世界「文化」遺産でも、平泉や富士山、白川郷、紀伊山地、法隆寺地域、厳島神社などは、森に囲まれた風景が真っ先に目に浮かぶ。更に、アニメなどのポップカルチャーでも、例えばポケモンに描かれる背景の森はまさしく日本である。仮にアラビア人が原作者だったら、情景描写は全く違うはずである。こんなところからも、海外の人々に日本の森は浸透し、脳裏に焼き付けられている。

豊かな日本の海

日本は海も広大で豊かである。

意外かもしれないが、日本の海の面積は世界第6位を誇る。そして、太平洋には黒潮（暖流）と親潮（寒流）が流れ、両者がぶつかることで多様な生態系が形づくられる。一方日本海は、過去に太平洋と切り離された時期があったため、全く異なった生態系を構築している。多様な海に囲まれる日本近海は、2010年に発表された海洋生物センサス（COML）で、世界のどこにも負けないくらい生物多様性が高いと評価された（海洋研究開発機構2010）。

観光面から日本の海を考えると、朝、知床で流水ウォーキングを満喫したその足で飛行機移動すると、夕方に沖縄のサンゴ礁でダイビングができるほどコンパクトで多様な自然に恵まれている。そのような国は世界を探しても日本しかない。アメリカも流水とサンゴ礁の両方を持つが、流水はアラスカ、サンゴ礁はハワイと、コンパクトでない上に旅行で移動するのは現実的でない。

また、近年人気を博しているクルーズでも、海洋は観光の可能性を秘める。海上で鳥やイルカの群れを発見した時の感動は忘れがたい経験となる。

なお、豊かな海があるということは、多様な海産物があり食が楽しめるということにも繋がる。魚、貝、甲殻類、海藻等々ヘルシーで美味しい日本食は、世界的に人気上昇している。山の幸も含め、日本の食の活用も、観光にとって

大きなアドバンテージになる。

以上、日本は乾燥地帯が取り巻く緯度に偶然生じた奇跡の森林国で、かつ豊かな海を持つ。この現実を、日本人は観光立国実現のために肝に銘ずる必要がある。日本は世界的にも訪れるに値する魅力的な自然を兼ね備えた奇跡の国なのである。

観光産業をけん引するのは誰か？

ここで日本経済に目を転ざると、近年は製造業を軸とした輸出産業の先行きに暗雲が漂っている。そして製造業の穴を埋めるために観光産業に期待が寄せられている。特に海外からの旅行者の誘致、いわゆるインバウンド観光には国を挙げて力を入れており、今のところは順調に



里山を観光デスティネーション化するためのワークショップの1コマ＝神奈川県平塚市ゆるぎ地区（著者撮影）

実績を伸ばしている（観光庁2017）。

ところで、インバウンド観光とは、貿易的な観点から見ると、自動車同様、輸出産業と見なされる。

日本車は、洗練されたプロダクトデザインで、安全性や燃費に優れ、10年以上長持ちするので、輸出先で良く売れた。それに倣うと、魅力的なランドスケープデザインで、快適性や環境に優れ、100年持続する観光デザインを、我々は今後日本各地につくっていく必要がある（田中2017）。

バブル時代を振り返れば分かるように、もともと日本は国内観光に業界が傾倒していたので、インバウンド観光に力を入れてこなかった。そのため、外国人観光客数は長らく年間数百万人程度に留まっていた。

しかし、21世紀に入り、日本は観光立国推進を宣言した。そして、力任せのプロモーションと、おびなりにしていたビザの発給要件緩和などを行うだけで外国人観光客は面白いように増えた。ただし水道の蛇口を捻って水を出すのと同じ単純なノウハウで再現性もないので、この成功体験は後世繰り返さない。

何はともあれ、今やインバウンド観光客は年間3000万人を超える勢いである。現段階で、一部の観光地はすでに飽和状態で、大都市や有名観光地のホテルは稼働率が9割に達することもある。

今や、大量に押し寄せ過ぎるインバウンド観光客の負の問題は、世界で物議を醸している。例えば、2017年バルセロナで、日常生活に

支障を来すまで増加した観光客を標的に行われた自動車による襲撃テロ事件は記憶に新しい。日本でも、インバウンド観光の恩恵が、一部の人々に偏って格差が生じないように、利益を再配分する仕組みが必要だろう。

観光入込客や利益が一部に集中するインバウンド観光の偏りを解消し、観光収入を国内の隅々にまで行きわたらせるためには、農山村や自然地域へ目を向けさせ、観光デザインを分散させると効果的である。自然地域といっても、屋久島や小笠原、白神山地、知床の世界自然遺産といった既に著名な観光地ではなく、むしろごく一般的な農山村や里山などにとって農山村や里山はありふれた日常かもしれないが、先ほど述べたとおり、日本の自然自体が世界の人々にとっては奇跡なのである。洗練されたコンセプトに基づき、ストーリー性のある観光計画や地域デザインを農山村に取り入れるだけでも適度な観光客が訪れる。

ここで忘れてはならないのが、観光地を創り出す土地利用管理の職能を、従来の旅行3業界（旅行代理店、運輸業者、宿泊業者）は持つていないという点である。必要な人材は、土地利用制度を熟知し、計画・管理できる人々である。要するに、都市計画者や、自然公園レンジャー、そしてフォレストナーたちである。

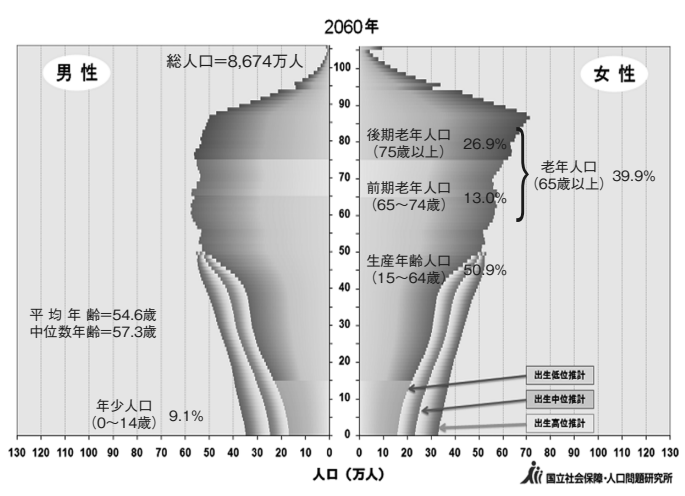
森が多い農山村では、インバウンド観光誘致の成否が彼らの双肩にかかる。肝心なのは、観光産業の成否の一翼は、例えばフォレストナーが、木材生産のみに傾倒せず、如何に人が訪れ

たくなる景観や遊歩道、展望所、宿泊地などを創れるかというセンスにかかるという事実である（由田2017）。

激変する自然環境・社会環境

ところで、今後の日本の自然管理は、従来の自然観のもと経験的に続けても、近い将来行き詰まることを忘れてはいけない。なぜなら、日本の自然環境・社会環境は今後数十年のうちに激変するからである。

自然的側面では、気候変動が懸念される。日本の温暖化は今後目に見えて進む。NHKが国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の成果を用いて公表した「2050年日本の天気」という未来のシナリオ（NHK



2060年における日本の人口推計（出典：国立社会保障・人口問題研究所）

2014)によると、現在11月にピークを迎える京都の紅葉は、2050年にはクリスマスシーズンにまでずれ込む。旅行業にとっては、紅葉と年末年始という二つの書き入れ時が統合するだけでも経済的に痛手であるが、そもそも年末年始の紅葉という事実を我々は何のように受け止めるべきなのだろうか。哲学的にも奥が深く、皆で対応を考えざるを得ない課題である。

紅葉のずれ込み以外にも、スキーなど雪に頼る山岳リゾートや、珊瑚の白化が懸念される沖縄などは、観光対象自体の消失が懸念される(田中2015)。観光業界は近い将来、その対応に日々追われ続ける状況に陥る。

また、自然に留まらず、社会環境の劇的な変化も大きな課題である。

例えば、人口減少や高齢化により、自然地域の管理がそもそも疎かになる。ただ、観光面ではそれだけに留まらない。2060年には日本の人口は8674万人まで減少し、なんと86歳の人が最も多くなる(国立社会保障・人口問題研究所2012)。日本の国内観光客のボリューム層となる後期高齢者に提供する観光サービスのノウハウを我々は十分持ち合わせていない。2060年とは、今の大学生が、まだ現役で働いている近未来である。

加えて言えば、そもそも今ですら旅行3業界は、企業経営戦略の面で安穩としていられない状況にある。日本の旅行業は低い利益率に喘いでいる。運輸業には高運賃体質や地方交通の維持問題等が待ち受ける。地方旅館は自立性が低くて集客の伸び悩みや雇用の確保(労務倒産)

の危機に晒される。更に言えば、地方創生の側面からは、旅行3業界の利益は都会に環流しがちなので、農山村にはうまみが少ない。国土の均衡ある発展のためには、業界全体のリストラが必要な段階に入っている。

リストラの先には、観光地づくりから旅行業の経営までを一手に扱える実力を持つ地元主導の組織、DMO (Destination Management Organization) の育成が求められている。DMOが順調に動き出すと、地元の観光消費が増え、波及効果で地域食材や特産品の売り上げが伸び、一次産業も潤う。要するに地元の6次産業化が円滑に進む。観光先進国では、既にDMOが効率的に動き、自然管理と企業経営とを一



destinations management の概念を具現化したニュージーランドの国立公園で行われるガイドツアー—
エイベルタズマン国立公園 (著者撮影)

体に見た戦略的な地域マネジメントを行っている事例もある(田中2013、田中・二重作・シヨウ2017)。

おわりに

以上、インバウンド観光の振興を念頭に置いた我が国の農山村のあり方について、いくつかの論点を述べてきた。

日本の自然は、外国人から見ても間違いなく「訪れるに値する」観光デスティネーションである。しかしながら、この多様な自然は、たった数十年の間に激変していくことが確実である。今の大学生が定年退職するまでに、この変化は起こる。変化に対応できる人材育成を含め、今後農村主導の観光産業を育成できるか否かが、この国の明暗を分けることだろう。

引用文献

- 海洋研究開発機構(2010)7月26日付プレスリリース
<http://www.jamstec.go.jp/focml/reference/presentation01.pdf>
- 観光庁(2017)観光白書 平成29年度版
- 田中伸彦(2017)明治神宮外苑の変遷図から読み解く観光まちづくりのエッセンス、都市計画、329
- 由田幸雄(2017)森林景観づくり、日本林業調査会
- NHK(2014)科学者が予測する 2050年 日本の天気
<https://www.youtube.com/watch?v=NcQVhJwmyuo>
- 田中伸彦(2015)気候変動下における山岳リゾートの将来展望と適応策、森林環境2015、森林文化協会、99-108
- 国立社会保障・人口問題研究所(2012)日本の将来推計人口平成24年1月推計
- 田中伸彦(2013)「マネジメント」をキーワードとした領域学としての大学観光教育の体系化に関する検討、日本観光研究学会全国大会学術論文集、28、69-72
- 田中伸彦・二重作昌満・シヨウテイ(2017)デスティネーションマネジメントフレームワーク(DMF)の概要、日本観光研究学会全国大会学術論文集、32、185-189